2024
4月号
第407号

教区だより

真宗大谷派京都教区 教化広報誌

Shinran 850th

〈座談テーマ〉
南無阿弥陀仏
人と生まれたことの
意味をたずねていこう

今月の「ことば」

お花は見る人たちを選ばない

今月の「ことば」は、教区駐在教導が担当しています

CONTENTS

2面
今、この時に、親鸞聖人に遇う
長浜教区第23組 藤森 千春 氏

3面
特集
部落差別問題に学ぶ 同朋協議会 研修会
近江第1組 東 美恵子 氏

4・5面
特集 拾学舎
育成研修部会
近江第2組 中野 晃人 氏
若狭第2組 堂谷 昌孝 氏
育成研修部会 中島 正泰 氏

6面
特集
仏事をとおして聞く
出版部会 岩永 晶子 氏

7面
教務所からのお知らせ
イマダカラ

8面
今月の行事予定

京都教区内の風景をお届けしています。『教区だより』では表紙写真の募集を行っております。詳しくは教務所（教区駐在教導）までお気軽にお問い合わせください。

今、この時に、親鸞聖人に遇う

お念仏からの呼びかけ

長浜教区第二十三組 真西寺（しんさい） 坊守
藤森（ふじもり） 千春（ちはる）

京都教区の皆さま、こんにちは。長浜教区は、七月からご一緒に活動させていただくこととなりました。皆さまとの新しい出会いを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、滋賀県北部マキノ町のお寺で育ちました。子どもの頃、たくさんのご門徒がお参りに来られ、とても賑やかで嬉しかったような記憶があります。そしてお勤めが始まりますと「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と本堂中にお念仏の声が響き渡り、何か不思議な空間に居るような思いがしていました。また、私の祖母はいたる時に、いたる場所でお念仏を申していた人でした。そんなところに育った私は、いつの間にかお念仏が心にとどまっていたということに、この歳になって気づかされています。

思春期の頃には、意味のわからない念仏を称（とな）えるのがいやで、抵抗を感じていた時もありました。でもそんな私が「念仏とは」と考えるようになったのは、三十代半ばにある悩みに出遇ったことで、和田稠先生のお話しを聞きに寄せてもらったことがきっかけでした。

ちょうどその頃、ご門徒のSさんが「念仏がわからん、南無阿弥陀仏がわからん」と同朋の会に来られるたびにおっしゃっていました。同じことを考えておられる方がいらっしゃる、この方と一緒に聞法させていただこうと思いお誘いして、和田先生が出向かれる場所に出かけては聞法をさせていただきました。

しかし、数年後先生がご病気になられ、いよいよこれが最後のお別れという時に「先生がいなくなったら、私はどうしたらいいのですか？」とお聞きしました。先生は「求め続けよ。必ず出遇える」とおっしゃってくださいました。何ともよくそんなことをお聞きしたものだと、自分にびっくりするのですが、その反面、よくぞお聞きしたという思いもあります。というのは、そのことがその後の私の背中を押してくださる宝物になったからです。そして、その後出遇わせていただいた那須信孝先生に「「必ず出遇える」というのは、仏さま（南無阿弥陀仏）のことなのですか」とお尋ねしました。那須先生から「そうですね。でも、それは人を通さずには出遇うことはできません」ということばをいただきました。

「人を通して出遇う」ということを考えますと、今回のテーマ「親鸞聖人に遇う」ということは、書物でも遇うことはできるのでしょうが、親鸞聖人のことばに頷いてこられた人達と出遇うということでもあるのだと思います。釈尊から綿々と受け継がれてきたお念仏が、親鸞聖人によってますます顕かにされ、そして聖人のことばに頷いてこられた人達によって、私にまで届けられた。それは幼き頃、お念仏を称えてくださっていた人達の声を聞き湧き出た問いが、私の人生の中で変化しながらまた問い直させ、今もなお不思議に歩ませていただいている。そのことを思います時に、お念仏を伝えてくださった人達へのご恩に感謝せずにはいられません。

花まつり子ども大会
毎年五月に長浜別院大通寺で行われます。子どもたちが本堂や境内で大いに遊び、白象を引いて長浜の街を歩きます。

特集 部落差別に学ぶ同朋協議会

協議会研修会（公開研修会）

長浜教区から二人の講師をお招きして、公開研修会が開かれました。改編を目前に控えて、長浜教区でのこれまでの歩みに触れながら、あらためて「部落差別問題に学ぶ同朋協議会設立の願い」についてお話しいただきました。参加された方にレポートしていただきました。

近江第一組 唯傳寺 坊守 東美恵子

二月七日、教区会館において、部落差別問題に学ぶ同朋協議会公開研修会が行われた。テーマは「部落差別問題としての長浜教区としてのこれまでの歩み―教区改編にあたって―」。講師は、長浜教区部落差別問題協議会会長の澤面宣了氏と同会副会長の嶌津俊治氏。

新教区における同会設立の願いとして、「教区改編によって、旧長浜教区「部落差別問題協議会」と旧京都教区「部落差別問題に学ぶ同朋協議会」が一つの団体「京都教区部落差別問題に学ぶ同朋協議会」として立ち上げられます。新たに活動を開始するにあたり当会の活動方針を言葉にいたします」という言葉で始まる、A4用紙二枚にまとめられた文章が配布された。

最初に澤面先生は、長浜教区と京都教区の組織の名称の違いは「に学ぶ同朋」の語句があるかないかだということにふれられた。その語句をさらに分けて「に学ぶ」とは、「差別の現状を学ぶ」にとどまらず、「自分では気付かない私の差別体質と体質にまでなった社会構造を問い続け」ることと設立の願いの文章を用いて示され、その中でも特に「体質」について、お寺の体質、我々の体質を問うておられた。

また「同朋」について、同朋に「御」をつけ「御同朋」とし、「子」のふりがなを「みこ」と書き記しておられる親鸞聖人は、「われら」という視点をもって歩まれたのだろうと。そして、『あの子』（ひぐちともこ作・絵／解放出版社）という絵本を読まれた。名前を持つ一人の人間を、「あの子」という言い方で顔の見えない存在にしてしまい、ごく短い会話や心の声だけで周りの人を巻き込んで空気や流れをつくっていく様子が描かれていた。あーあるなぁ、こんなこと。私どっちかな・・・あの子と呼ばれる方か、あの子と呼ぶ方か、いや呼びも呼ばれもせず遠まきに見ていることもあるかな、などと思い、自分の立ち位置の流動性みたいなもの、人と人との間にある空気感の不確かさのようなものをあらためて感じた。

後半は、副会長の嶌津先生から、長浜教区のこれまでの歩みについてお聞きした。部落差別問題に関する研修会については、現京都教区では各地区に任せられているが、現長浜教区では各組で毎年行われ、これは教区改編後も継続していくとのこと。歴史をふまえ、しっかりとしたカリキュラムで熱心に継続して学びを深めておられる様子を示して下さった。しかし、いつまでやっているんだ、寝た子を起こすな、というような声があるのも事実とのこと。それらを受けたうえで、新教区同会設立の願いにも記されている「教団と教団に所属する者の差別の歴史を検証し、社会にある部落差別問題を学ぶということは、真宗の教学や教化の内容と教団の体質を問い、一人ひとりの真宗門徒の生き方を確かめることとは別のことではないのです」という言葉でしめくくられた。

研修会最初の挨拶で谷会長が「教区合併でなく改編。編みなおす、紡ぎなおす。人とのつながりを編みなおす」とおっしゃっていたことが、私自身においても組織においても通底する課題のように感じた研修会だった。

特集 育成研修部会 拾学舎

歎異の精神を基底にして、現代を生きる一人ひとりが宗祖親鸞聖人のお言葉に学ぶことを趣旨に、真宗大谷派僧侶としての基礎的な「教学」「声明作法」の学びの場として、二〇一五年度より「拾学舎」を開催してきました。大谷派僧侶、坊守、准坊守などの責務を抱えながら日常の多くを寺院教化以外の職務に携わってこられ、環境的に学ぶ機会を得難かった方々を迎え、出会いと学びの場になることを願いとして開催されました。

拾学舎で真宗仏事の相続を学ぶ

近江第二組 願林寺 住職 中野晃人

「葬儀をするようになって人間は人間となった」この一言から始まった第四期の拾学舎。先住職である父が命終し突然住職を拝命した私にとり、この大切な「葬儀」という儀式を、教学・声明作法という両軸からあらためて学ばせて頂く貴重な機会となりました。

竹橋太先生（本廟部出仕）の「教学の学び」では、何万年と続けられてきた弔いの儀式に慎みを持ちつつその儀式を真宗の仏事としていく事の大切さを学びました。死を通して、我々は生の世界に生きていることを感じさせてくれる儀式。当たり前だった共同体の輪が欠け、そこから新たな輪を作る大切な儀式。葬儀における様々な背景や意義、仏事を執行する我々が持つべき思い、心得をお教え頂きました。

一方、「声明作法」では松田憶先生（本廟部堂衆）から、そのような葬儀の意義をいかに表現し、正しく伝えていくか、という声明作法のありかた、ひいては真宗仏事のありかたを装束、声明、また野卓を含めた荘厳に至るまで、基本から実践にわたりお教え頂きました。

さらに「攻究」では、第一線で仏事を執行されているメンバーとともに、テーマに基づき最前線で起こっている実態を共有。特に都市部と山間部、真宗寺院の多い地域と他宗派が多い地域での儀式執行における違い、儀式簡略化への対応など、その課題を確認し、教学に戻って論議致しました。この経験は学びを深め自らの中に落とし込む一助となりました。また、宗派の大きさ、京都教区の広さを感じる場でもありました。

全六回の締めくくりとして行われた模擬葬儀では導師を拝命し、「教学の表現が儀式であり、一方、儀式がなければ教学は伝わらない」との思いに立ち返り、教えて頂いた教学、声明作法を表現させて頂きました。

カタチがなければ伝わりにくい。しかし意義を問うからこそ、そのものを相続できる。時、場、人によってその表現は変わるかもしれません。教学は不変だが表現は変わる。いや、時、場、人によって変えないと伝えきれないのではないでしょうか。ご説明いただいた葬儀式和讃の改定等もその一つかもしれません。

だからこそ、その教学を背景、意義から学び、儀式の中で正しく表現し、儀式を通して真宗の教えをお伝えするのが私たち住職の責務であると思います。

最後に、対面とZOOM併用など受講しやすい環境をご配慮下さった平原主査及びスタッフの皆様、事務局の皆様、大変有意義な場を頂きました。ありがとうございました。

拾学舎での深甚なる学び

若狭第二組 法順寺 住職 堂谷昌孝

六回にわたる拾学舎に参加させて頂いて、多くの事を学ばせて頂きました。お寺以外の仕事に長く携わってきましたが、退職後にお寺へ帰り、仏法は様々な形で学んできたのですが、声明作法となるとどうも疎かにしがちでした。そんな中で、育成研修部会主査の平原晃宗さんとお話をさせて頂く機会があり、いろいろと自分の今の状況について聞いて頂き、幾つかのアドバイスを頂きました。その中の一

つとして、拾学舎に参加してみては、というアドバイスを頂きました。若干戸惑ったのですが、勇気を出して参加してみようと考え、受講をお願いしました。全六回の研修会でしたが、竹橋太先生による「教学の学び」では、様々な事を感じつつ多くの事を学ばせて頂きました。竹橋先生ご自身が身を通しつつ学んで来られたことが、講義でのお言葉やお姿から伝わってきました。知識を頭に入れて終わりではなく、声明を通して繰り返し自分に学び聞かせる作業の大切さを知りました。仏法を知識として頭に入れ、それで分かった気になって歩みを止めていたということが分かりました。また、松田億先生の「声明作法の学び」では、ご講義される松田先生のお姿から、単に声明をすれば良いのではなく、心して声明すべきことを学びました。疎かにしていた自分を恥ずかしく思いました。特に第六回の模擬葬儀では、鑿役を仰せつかりましたが、普段の心が形となって現れてしまいました。作法は声明に向かう「心」だということを学ばせて頂きました。お二人の先生方からは、知識優先の私に、仏道とはかくのごとしということを教えて頂きました。そして、優しいお言葉の中に猛省を促す厳しい評価を頂き、心にしっかりと刻まれました。深謝申し上げます。また、講義後の受講者間の話し合いでは、皆さんが真摯に取り組んでおられるお姿に出会い、正直感じ入りました。このような大切な場を準備して下さったスタッフ・事務局の皆様方に感謝申し上げます。

第四期「拾学舎」を終えて

育成研修部会　中島正泰（なかじま まさやす）

二〇二四年二月十七日、第四期「拾学舎」を終えた。二〇二二年十二月二十四日から始まり二年にわたる計六回の学習会である。受講者十三名、スタッフ八名、聴講者二名で、駐在教導二名に事務局をお世話になった。この「拾学舎」の趣旨は「歎異の精神を基底に、現代を生きる一人ひとりが宗祖親鸞聖人のお言葉に学ぶことを趣旨として、真宗大谷派僧侶としての基礎的な「教学」と「声明作法」の学びの場を開きます」とし、兼職の僧侶が参加しやすいように土曜日の午後開催としている。第一期「教行信証」、第二期「正信偈」、第三期「歎異抄」をテーマとして実施されてきた。今回第四期は「葬儀」をテーマとし、「教学」は竹橋太先生、声明作法は松田億先生にお世話になった。竹橋先生は「葬儀で聖人の教えに、いかに出遇うか？」が大切と話された。コロナの影響もあり、対面は第一回と第六回のみ、他はZOOM開催となった。ZOOMは、文字情報や会話は正確に伝わるものの、臨場感に欠け、声明の音声では部分的に途切れることもあった。松田先生は「ZOOM開催によって主催者・参加者ともにパソコンを利用する能力も上がり、文字バケや文字がぼやけることもなくなったが、かゆいところに手が届かないもどかしさがある」とおっしゃった。第五回までの概要は、「教学」は葬儀の意義、伽陀（かだ）、勧衆偈（かんしゅうげ）二回、葬儀和讃を学び、「声明作法」は、葬儀装束、伽陀と偈文、路念仏（じねんぶつ）と「正信偈」墨譜（ぼくふ）、葬儀和讃、葬儀荘厳を学んだ。最終回の第六回では、模擬葬儀を二回実施。受講者全員で野卓を組み立てるところから始めた。野卓は近江第六組若手会が管理所有しているもので、幸い近江第六組での葬儀と重ならず、貴重で立派な野卓一式を拝借できた。ご協力に感謝である。二回の模擬葬儀を終え、竹橋先生は「自信を持ってやるとうまくいく」、松田先生は「皆ベテランで、聞き易いお勤めでした」とのこと。報恩講や永代経、法事は複数でお勤めすることもあるが、最近の葬儀は僧侶一人で執行することが多く、何をどのようにしているのか、伝える機会が少なくなっている。参加者の井上至（いのうえいたる）さん（山城第二組 法泉寺）から「実践することの大切さを感じた。先輩から伝え聞くことがないので、良かった」と聞いた。終了後、両先生を交えて和やかな懇親会で第四期「拾学舎」を閉じた。

特集 仏事をとおして聞く

ご門徒さんのご法事は、門徒にとってはもちろん、僧侶にとっても最も身近な仏事の一つである反面、ご家庭へ僧侶一人が出向くことが多く、悩みや工夫など経験から得たものを共有できる機会が、少ないのではないでしょうか。そこで、今回はご自坊のウェブサイトで法事の場における自身の工夫などを公開しておられる、谷大輔住職(近江第二組良覺寺)にお話しをうかがいました。(不定期連載)

第二回「法事を工夫する」

出版部会　岩永晶子(いわなが あきこ)

―ご法事においてオリエンテーション（事前説明と冊子配布）を始めたきっかけは何ですか。

住職になって感じたのは、教えや作法が浸透していないことでした。他宗派の寺院が多い地域性もあり、法事も罪福を信じる心で勤める「先祖供養」とお考えの方が大半でした。そこで、少しでも真宗のみ教えやお作法をお伝えしていきたいと考え、法事のオリエンテーションを始めました。

―オリエンテーションの具体的な中身を教えて下さい。

まず、ご法事を依頼された時点で、事前に施主さんとおおまかな相談をします。その際、例えば「現代語のお経を読みたい」といった要望もお受けします。当日もいきなり勤行をはじめるのではなく、法事の意味や作法を確認するため、事前説明の時間を設けています。またその際、参列者に手作りの冊子をお渡ししています。これから始まる法事の内容が分かることで、安心してお参りしてもらえますし、主体的にお参りしてもらえればと考えています。

―手作り冊子はどんな内容ですか。

冊子には、お作法の説明や、法事の次第とその意味、また「阿弥陀如来」「親鸞聖人」といった言葉の解説などを載せています。本来簡単に説明することはできない内容ですが、なるべく簡潔に書くよう心がけています。

冊子を持ち帰って読んでいただけることも期待して、お斎の際に使う食前・食後の言葉なども載せています。

―このような取り組みは、独自にお考えになったものですか。

住職になって試行錯誤している頃に、教学研究所や岡崎教務所にお勤めであった渡邉晃純(わたなべ こうじゅん)師をはじめとする先輩方から、大きな影響を受けました。

「仏事を教化(きょうけ)の場にする」という願いのもと、新たな工夫をすることに前向きな方々に出あったことが、自分なりの工夫への背中を押してくれました。

―取り組みに難しさはありませんか。

確かに、ご法事に特有の難しさを感じることもあります。お寺で勤まる法要には「法話を聞こう」と思う方々が集まって下さいます。一方、ご家庭のご法事では「先祖供養のため」とお考えの方も多く、仏法聴聞の機会となってほしいと願う僧侶の側と思いにズレが生じます。また、コロナの影響で法事が縮小し、浸透してきたお作法なども再び伝わりづらくなっています。

意識のズレを埋め、お作法を正しく伝えるためにも、オリエンテーションが大切だと感じています。

―最後に、現在のお考えをお聞かせ下さい。

ご法事が仏法聴聞の場になってほしいと願って、自分なりに工夫してきました。お陰様で、住職になった当初に比べれば、教えやお作法が浸透したと感じられる場面もあります。

けれども、ご法事の現場では私の法話よりもご遺族が語られた言葉が参列する方々の心を大きく動かし、それがみ教えに通じていく場面に出遇うことがあります。教化というのは「私の意図を超えた世界」「仏さまのお心」によってなされていくものだと思います。自力を尽くす道のりの中で、他力に出遇わしていただくのだと感じています。

―ありがとうございました。

今回は、谷住職の取り組みをご紹介しました。法事をはじめ仏事一つ一つが一層充実したものとなるよう、みなさんの悩みや工夫などを紙面を通じて共有していければと思います。

教務所からのお知らせ

【得度受式者】

二〇二四年三月七日

・近江第七組　大圓寺　内田　湊

【住職任命者】

二〇二四年二月二十八日付

・近江第三組　安樂寺　千代　哲雄

【敬弔】

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

・近江第十一組　西德寺

前坊守　小菅　珠子　九十五歳

二〇二四年二月二十一日

・若狭第二組　正覺寺

前住職　楠　義臣　八十六歳

二〇二四年一月二十九日

・石東組　浄久寺

住職　三好　章圓　七十七歳

二〇二四年二月五日

〔寺院教会番号順　敬称略〕

「令和六年能登半島地震」災害に対する救援金の勧募について（依頼）

去る一月一日「令和六年能登半島地震」が発生し、能登地方を中心に広域にわたり未曾有の被害をもたらしました。このたびの地震の影響を受けた北陸の地は真宗門徒の多い地域で、とりわけ震源地である能登地方は、近年、度重なる地震により何度も苦しい思いをされていました。

そのような中で、このたびの巨大地震の発生により、多くの寺院・ご門徒が甚大な被害を受け、大変深い悲しみと不安の日々を過ごされております。

つきましては、何卒ご理解を賜り、有縁の方々にもお声がけいただき、可能な限り救援金をお取り纏めの上、同封の郵便払込用紙にて送金くださいますようお願い申し上げます。

また、このたびの被害状況から、京都教区としての救援金支援は、複数年度間に亘る必要があると考えております。今後の継続支援としての勧募は情勢を検討しながら改めてお願い致しますので、引き続きご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

京都教区救援金総額

二〇二四年三月十八日現在

11,705,889円

救援金　一口　一万円

※同封の郵便払込用紙にて送金ください

イマダカラ

月参りに行く途中の交差点付近に、いつもお花とお供え物が置かれている場所があり、私はいつもそれを複雑な気持ちで見ている。

この場所に限らず、車で走っている時や、歩いている時にもそのようなものを見かける時がある。最初は、世間の人からすると「成仏してください」というような意味もあるんだろうなくらいにしか思っていなかった。けれど、もし時間を戻すことができたとしたら、自分だったらそこには行かないようにするだろう。そう考えると、その場所にお供えする意味は？

十年ほど前のことになるが、川崎市で起きたある事件の後、被害にあった現場に沢山の献花が集まり、手を合わせる人々が後を絶たず四ヶ月ほどたったところで親族の申し出により撤去されるということがあった。その時の被害者の母親の言葉を今でもおぼえている。「いつまでもあの子が縛り付けられているようで辛い」。それを聞いたとき、今まで私が感じていた複雑な気持ちを言葉で言い表してもらったように感じた。人が亡くなった場所を大切にするという感情はどこからくるのだろう。生きている側の一方的な思いなのではないか、と。今朝も月参りの途中で複雑な気持ちになった。

（出版部会　仲野（なかの）　恵理子（えりこ））

編集後記 The editor's note

先日、是旃陀羅問題学習テキスト『御同朋を生きる』を、寺院・教会定期直送便に先んじて入手したので、普段『部落問題学習資料集』を輪読している仲間と試みに輪読してみた。少し読んでみただけだが難解な印象を受け、「同朋の会」に用いることができるのか不安に思った。一方で、そこからお互いに話しあい聞きあうことができた気もしている。「同朋の会」が本当の意味でひらかれた場となるかどうかは、テキストに向きあおうとする姿勢にかかっていると感じた。（出版部会　比叡谷（ひえたに）　真（まこと））

京都教区 4 月の行事予定

教区・地区・関係団体事業

9日(火)	13:30～16:30	教区同朋会議	しんらん交流館
10日(水)	9:30～15:30	坊守会 基礎講座（zoom 併用）	教区会館 2 階 大講堂
10日(水)	15:50～17:50	坊守会 学習会	教区会館 2 階 大講堂
10日(水)	16:00～18:00	准堂衆会 声明会	教区会館 2 階 研修室
11日(木)	16:30～18:00	教区 仏青 声明教室	教区会館 2 階 大講堂
19日(水)	9:00～16:00	親鸞ウォーク	大谷祖廟
23日(火)	16:00～18:00	准堂衆会 声明会	教区会館 2 階 研修室
26日(金)	14:00～17:30	教区 准堂衆会	教区会館 2 階 大講堂
30日(火)	13:00～17:00	靖国問題学習会 公開講演会	教区会館 2 階 大講堂

教区諸会議

5日(金)	13:30～17:00	新教区教化方針策定協議会	長浜教務所
8日(月)	13:30～16:30	教化推進本部 出版部会（Zoom 会議）	Zoom
11日(木)	14:00～17:00	教化推進本部 出版部会 総括会議	教区会館 3 階 会議室
12日(金)	13:30～17:00	教区門徒会（臨時会）	教区会館 2 階 大講堂
15日(月)	10:30～15:00	青少幼年教化部会	教区会館 3 階 会議室
23日(火)	13:30～17:00	部落差別問題に学ぶ同朋協議会 総会	教区会館 2 階 大講堂

教区別院事業

6日(土)	14:00～16:00	伏 見	声明作法講座 法話 浅井誠 師（山城第3組 皆演寺）	伏見別院
10日(水)	14:00～17:00	伏 見	同朋会 御文輪読	伏見別院
10日(水)	13:30～15:30	山 科	同朋の会 法話 赤松崇麿 師（教区駐在教導）	山科別院
12日(金)	14:00～15:30	大 津	同朋の会 輪読会	大津別院
13日(土)	10:00～11:30	岡 崎	味読正信偈 法話 福田大 師（輪番）	岡崎別院
15日(月)・16日(火)		赤野井	教如忌法要（15日逮夜 14:00　16日晨朝 8:00　16日日中 10:00）【法話】酒井義一 師	赤野井別院
16日(火)	10:00～教如忌後	赤野井	戦没者追弔法会	赤野井別院
22日(月)	19:00～21:00	伏 見	親鸞教室 法話 藤原正寿 師（大谷大学准教授）	伏見別院
23日(火)	10:00～11:30	岡 崎	歎異抄を読む 法話 近藤悠 師（列座）	岡崎別院
25日(木)	14:00～16:00	山 科	八代講 兼 定例法話 法話 平原晃宗 師（山城第5組 正蓮寺）	山科別院
27日(土)	14:00～16:00	伏 見	ご命日のつどい 法話 長嶋明子 師（近江第6組 願證寺）	伏見別院
27日(土)	12:00～13:00	赤野井	定例法要（宗祖親鸞聖人御命日逮夜） 法話 中川眞 師（輪番）	赤野井別院
30日(火)	14:00～16:00	大 津	同朋の会 聞法会 法話 藤森千春 師（長浜教区 真西寺）	大津別院

教務所閉所のお知らせ　**4月24日(水)・25日(木)**　※近畿連区所員研修会のため教務所を閉所いたします。

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年 慶讃記念事業

真宗聖典（第二版）

聖教編纂室 編

■大判／A5判・1424頁・ケース付き　価格 4,950円(税込)
■小判／B6変形判・1424頁・ケース付き　価格 4,400円(税込)

2024年 4月1日 発刊!!

東本願寺出版
ホームページから
ご購入いただけます

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌
『教区だより』第407号
[発行人] 篠岡誓法（真宗大谷派京都教務所長）
[発行所] 真宗大谷派京都教務所
〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入
Tel:075(351)5260　Fax:075(351)5256

【表紙の写真】ムスカリ（石東組 善徳寺 河野恵嗣）
発行日 2024（令和 6）年 4 月 1 日
メールアドレス：kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派 京都教区 Webサイト
https://www.k-kyoku.net
京都教務所 検索